

『金瓶梅』にみる中国医学

吉元昭治

はじめに

道教と中国医学との関係についてはすでにふれているが、本稿ではこれらの関係を、フィクションの世界でみることにした。権威的な医書や、宗教関係の書物でみる以外に、中国のいわゆる、小説類のなかにこの片鱗をみるのが可能であろうと思つたからである。フィクションにはそれなりの材料や時代背景があつたはずである。そこには人々の活々とした生活がにじみでている。

そこで、いわゆる四大奇書『水滸伝』、『三国志演義』、『西遊記』、『金瓶梅』や、『紅樓夢』などについて検討したが、ここでは『金瓶梅』についてふれたい。

本書はいうまでもなく、西門慶という、山東省清河県の薬屋の主人の半生を描いたもので、時代は宋の徽宗（政和年間一一二一—一一二七年）の頃となつてゐる。しかし本書の作者は、笑笑生というだけで本名は不明だし、明代の万曆中期—十六世紀の終り頃できたとされ、なお多くの検討がなされている。しかし内容からいって明代の情景といえる。

主人公、西門慶には一妻五妾があり、本書の名も、潘金蓮、李瓶児、潘金蓮の女中でもある春梅の三名の名から由来している。その他、彼には女性関係が多く、このため本書はその性的描写から、いわゆる淫書のレッテルがはられてしまつ

ている。彼はついには、催淫剤の誤用で命を失うに到る。その後、金軍の侵入で、一家離散の悲劇をむかえる百回本である。しかし、本書の評判はこれをゆるさず、『統金瓶梅』が生まれ、その後の物語がつづられている。『(詞話本)』

本書の内容を分析すると、いわゆる淫書とみるだけでは大きな誤りだと思われる。そこには、政治、経済、民俗、風習、音楽、詩詞、芝居等の芸術、飲食、家庭内の生活風景、娼婦の街、などあらゆる人々の生活が目の前にあらわれ、まさに、北宋(現、開封)の、汴京の有様を描いた、清明上河図の世界そのままである。

この『金瓶梅』の中国医学や道教に関する部分を抽出、分類してみると、その量の多さと、多彩さに驚くべきものがある。このうち、道教に関する部分は別稿とした。

一、中医学の医薬に関する部分

呉神仙(呉真仙)という、人相見をよくする道士が、西門慶の家に来て、家中の人相を見るが、これが、これからの西門慶および、彼の妻妾の運命の伏線となっている。彼は、「善曉麻衣相法、又曉六壬神課、常施藥救人」といっている。麻衣相法とは、麻衣道者が伝えたという相法で、他に柳莊派といわれるものがある。六壬神課とは、生年月日の干支によって吉凶を占う方法である(二九)。

この()は小説の章回(章または回)を示す。以下同様。

次に、西域天竺からやってきた胡僧は「雲遊至此。施藥濟人」といい、何か房術的薬がないかという西門慶に、催淫剤を与えるが、結局彼は、その誤用で命をおとすに到る(四九)。

西門慶の第五夫人李瓶児が病を得て、重篤となり、趙太医(趙掲鬼—ごまかし医者)も呼び入れたとき、彼の言葉のあとに「半積陰功半養身、古来医道通仙道」とある。明代、南豊李『医学入門』陰陽の項に「医通仙道、半積陰功、然陰功可半積而已乎」とあるのと同じ表現といえよう(六一)。

また、杏庵居士という金持ちの老人は、厚く神を敬い、道士のような衣をまとい、貧民救済を心がけていた。門前で病人に施薬し、家に二本の杏樹があったので、杏庵といわれていた。このところは、古く杏林の故事で名高い、董奉を思い出させる(九三)。

これらからしても、道士が薬を投与していたこと、道教と医学が極めて近い関係にあったことを示していることがわかる。

次に、各項目にわけて述べてみる。

和合湯^(註一)(二)……西門慶に潘金蓮をとりもつ、王婆が二人にさしだす茶湯(薬ではない)。婚礼時に祀る和合二仙からきている。

○迷魂湯(二〇)……これも薬ではなく、人が死亡したとき、迷魂湯をのみ、一切の生前のことを忘れさせ、死後の世界を送る必要があるという伝えから、死に到ることをいう。

○定心湯：李瓶児の分婉(三〇) 鏡磨きの老人とのやりとりの中(五八) 呉月娘の分婉(七九)に出てくる。分婉後の心虚状態(精神不安、息切れ、疲れ)の恢復に用いられる。一種の氣づけ薬。多くの註釈には、竜眼肉のむして汁としたものに、米のとぎ湯とまぜてのますとされているが、中医学的にみると次の二つが考えられる。一つは、『三因極一病証方論』にあり、茯苓、柱心、炙甘草、白芍、炮姜、炒遠志、人参に大棗を加えて煎じるもの。他は、『医学衷中参西録』に、竜眼肉、炒酸棗仁、山茱萸、炒柏子仁、龍骨、生牡蠣、乳香、没薬などからなるものがある。

○朱砂丸薬(四八) 硃砂丸(九〇)^(註二)……前者は、西門慶と李瓶児の間に生まれた官哥の病気のとき、後者は、呉月娘の息子、孝哥が病気のとき、劉婆が姜湯と共にのます。朱砂丸にも数種あって、例えば、『外台秘要』には、おこりを治す救急法として、朱砂、常山、牛膝等できるとあり、また『太平聖恵方』には、朱砂、鬼箭羽、雄黄、赤小豆からなる処方載っている。別に朱砂を羊胆に入れ、かげ干しにし、小豆大のものを十丸のむという、眼の前がくらくなる、急激な視

力障害に用いられる民間方もある。

○薄荷燈心湯(四八)：薄荷と燈心からなる簡単なものだから、おそらく民間方であろう。

○種子靈丹(五三)：西門慶の子を願う呉月娘に、薛姑子(尼)が届けたくすり。種子とは受胎のこと。鳥金紙に包まれ表面に、「種子靈丹」と書いてあり、彼女が握ると、臍下部が熱くなり、かぐと口の中に唾がいっぱい湧いてくる。この処はこの薬の効果のあらたかなことをいっているのである。

薬気が皮膚を通して作用するのは、外用薬もそうだが、握薬といって薬を手で握っておくという方法もあった。この内容、はつきりしていないが、『葉天氏女科』に、種子丹というのがある。蓮鬚、山茱萸、覆盆子、龍骨、芡実、蒺藜などからなっている。

○降火滋榮湯(五四)：李瓶児が病氣となり任太医が往診したとき、次の加味地黄丸とともに処方される。降火とは瀉火(解熱など)、滋榮とは養血(体力をつける)のこと。出典ははつきりしないが、『伝青主女科編方』に、滋榮養氣扶正湯の名をみる。人参、黄耆、白朮、川芎、熟地黄、麦門冬、麻黄等からなり、産後、寒熱有汗のもの初期に用いるとある。

○加味地黄丸(五四)：別名、八仙長寿丸、麦味地黄丸。『寿世保元』にみる。肺腎陰虚、すなわち、力なく、食欲減退、せき、軟便、性欲減退、盗汗、発熱、口渴などの老人に対応している。地黄、山茱萸、山藥、丹皮、沢瀉、五味子、麦門冬等からなる、六味地黄丸がもととなっている。

○燈心薄荷金銀湯(五九)：李瓶児の子、官哥がひきつけ、劉婆がよばれ、燈心、薄荷、金銀花よりなる薬剤を与えられる。前出の燈心薄荷湯に近いものと思われる。

○金箔丸(五九)：同じとき、月娘が官哥の口をこじあけ、これをとかして口に入れる。『小兒藥証直訣』にあり、金箔、天南星、白附子、防風、半夏、雄黄、朱砂、牛黄、水片、麝香等からなる。『衛生宝鑑』にも、同名をみるが、これは夜尿症を主としている。

接鼻散(五九)：官哥の病がますます悪化し、小児科医を招き、接鼻散のテストを行う。これを鼻孔に吹きつけ、もし鼻水が出れば治る見込みがあるとする。元来は、喉麻痺(ジフテリアなど)や、牙関緊急に用いられる。皂角、白矾、雄黄、藜芦等からなる。

○帰脾湯(六一)：李瓶児が性器出血がつよくなり、任医官の往診をうけ、投与される。本剤は、『濟生方』にもあるが、『校注婦人良方』の方をとりたい。すなわち人參、炒白朮、炒黃耆、茯苓、龍眼肉、当歸、遠志、酸棗仁等からなり、中医学でいう脾(血液をコントロールする働きがある)の異常、心(血液循環と関係する)の異常に用いられる。血崩(性器出血)、月經不調、不眠、健忘、疲労等に適應する。加味帰脾湯は貧血症にも使われている。

○三七葉(六二)：李瓶児に花大舅(母方の兄弟のおじ)が見舞いにきて、これをすすめる。またの名、田七、うこぎ科人參の一つ。止血、止痛等の作用があり、性器出血、吐血、下血、外傷などに用いられる。単剤だから民間方といえる。

○棕灰、白鷄冠花(六二)：同じ場面に出てくる。棕灰はしゅろ(棕櫚)の皮を焼いて灰としたもの(固渋止血法)。白鷄冠花は、鷄冠頭、これを煎じて、酒とともに服用し、性器出血に用いられる。民間方。

○梅蘇丸(六七)：西門慶が応伯爵にすすめる菓子類。これをたべると、つばがでて肺をうるおし、口臭を去り、痰をとり、食欲を助けるといっている。『遵生八箋』に梅蘇丸方が記されている。

○百補延令丹(六七)：応伯爵が西門慶に向かって、体を大切にしようというとき、彼は、任太医(後選)がこの薬を送ってくれ、これは宮廷でものみ、人乳とともに朝早くのむものだと説明する。百補延令丹とは不詳だが、延令丹は別名、妙応丹として、『太平惠民和劑局方』卷九婦人諸疾に、当歸、石膏、沢蘭、附子、木香、熟地黄、川芎、防風、人參、黃耆、厚朴、炙甘草その他からなるものがあるが、適応からこれではあるまい。『沈氏尊生書』に、延年益寿不老丹、『万病回春』に、延令固本丹などをみるからこれらに近いといえる。

○広東牛黄清心蠟丸(七五)：孟玉楼が嘔吐しつづけるとき西門慶がのましている。牛黄清心丸は『太平惠民和劑局方』

に、悪心、嘔吐、めまい、精神不安、不眠などに用いるとあり、白芍、麦門冬、黄芩、当帰、防風、白朮、柴胡、桔梗、川芎、茯苓、麝香、羚羊角、阿膠等二十八味の薬物からなっている。金箔で包み、蠟の球形カプセルの中に入っている（蠟丸）。

○暖宮丸薬（七六）：任医官が呉月娘の安胎を期して与える。『太平惠民和剂局方』に暖宮丸の名がみえる。硫黄、赤石脂、鳥賦骨、附子、禹余糧等からなる。月経不順、臍下腹痛、不妊症等に用いられる。（五三）に暖子宮の言葉があるが、中医学では不妊は、子宮などが虚寒状態にあるというので、そこを暖める方法をいう。

○延寿丹（七八）：西門慶は、任医官のくれた「延寿丹」を思いだし、服用したとあるが、任医官のくれたものは、（六七）の「百補延令丹」のことだから、延寿丹とはこのことであろう。しかし、このとおりの「延寿丹」とすれば、別名「黍米寸金丹」（『外科正宗』）ともいわれるのかもしれない。「延寿丹」の名は、その他『世補齋医書』『聖濟総録』『衛生宝鑑』『丹溪心法』などにみられるが、本文とつきあわせると『丹溪心法』のものが近い。すなわち、虚損をなおす目的で、天門冬、遠志、山薬、巴戟、赤石脂、車前子、菖蒲他十六味からなり、蜜でねり、丸薬としたものである。

○紅花湯（八五）：潘金蓮は、西門慶の娘むこの陳経済との間に、不義の子を宿す。経済は胡太医を訪ね、墮胎薬として、「紅花湯」をもらいうけ、目的をはたす。これは清の郭志遂の『痧張玉衡』にあり、紅花、蒲黄、青皮、香附、貝母、枳殼等からなり、下腹部の痛みなどに用いるが、紅花には、強い破血作用があるので、墮胎の目的に使用されたと思われる。

二、診察風景と謝礼について

この長い物語のうちで、武松、官哥（西門慶と妾李瓶児の間の子）、李瓶児、西門慶などの死を迎えるが、その病氣から死までの経過は、まず医師がよび入れられ↓婆子↓尼↓道士↓占い師↓陰陽師というパターンがくりかえされている。その

他、妊娠ときの診察が記されて、当時の医療事情を知るうえに、参考となる点が多い。

(二四) 西門慶のとりまきの一人花子虚は、金銭的トラブルで、彼にはかられ、

不幸害了一场傷寒。对季瓶兒還請的大街坊胡太医来看。後來怕使錢。只挨着一日兩、兩日三、挨到三十頭。嗚呼哀哉。

断氣身亡 亡年二十四歲。

ということになる。花子虚の妻、李瓶兒は夫、花子虚が病氣となっても、けちけちして、医師にみてもらうのも一日延ばしに延ばして、三十日はかり放っておいて、ついに死んでしまう。李瓶兒はその後、西門慶の第五の妾として迎えらる。

(二七) 西門慶と通じた、潘金蓮は、彼を恋いこがれて、氣鬱状態となり、蔣竹山という医師が往診する。この医師は金蓮を診て、その美しさに惚れ、彼は彼女から金を出させ、薬屋を開くが、西門慶に邪魔をされ、金蓮はついには、西門慶のものとなる。その竹山は、金蓮を診察すると、

娘子、肝脈弦出寸口而洪大、厥陰脈出寸口久上魚際、主六慾七情所數、陰陽交争、乍寒、乍熱、似有鬱結于中而不遂之
竟也、似瘧非瘧、似寒非寒、白日則倦怠嗜臥、精神短少、夜晚神不守舍、夢与鬼交、若不早治、久而變為骨蒸之疾。と
いう。

肝の異常のときは、脈診では弦脈となる。氣鬱から肝鬱となり、イライラ、不眠、精神不安状態となったことを示す。厥陰脈も同じ。寸口に出たとは、病変が心にまで、すなわち、第一指のつけねの魚際まで及んだことをいっている。神不守舍とは、『靈樞』大惑論第八十に、「心者、神之舍也」とあり、また同じく天年第五十四に「神氣舍心、魂魄畢具」とある。「骨蒸」とは現在の結核症と考えられている。さらに、李瓶兒は死んだ夫が「大街上胡先生」に診てもらったという
と、竹山は、

是那東街上劉太監房子住的胡鬼嘴兒？他又不是我太医院出身。知道甚麼脈？

すなわち、劉太監内の屋敷に住んでいる。口から出まかせの男だときおろす。太医とは元來官名であったが、時代とともに、たんに医師のことをいうようになる（現在では医師のことを大夫といっている）。太医院は皇室の侍医寮をいう。宋代では太医局といったが、元、明、清代では太医院といった。『金瓶梅』は時代背景は宋代をかりているが、実際には、明代の話であることがこのことでも知れる。

ここでの謝礼は銀三兩となっている。

(二九) 蔣竹山は西門慶のさしむけた、ならずもの二人のため、なぶりものにされ、折角開いた生薬店もこわされ、遂にはあとで死亡する。潘金蓮は西門慶の妾となる。その蔣竹山の店先の場面(図1)。

「你這舖中有狗黃沒有？」竹山笑道「休要作戲、只有牛黃、那討狗黃」又問「沒有狗黃、你有冰灰也罷、拿來我瞧、我要員你幾兩」竹山道「生藥行只有冰片、是南海波斯國地道的、那討冰灰來？」

牛黃、冰片という薬を狗黄、氷灰といっからかわれ、また「串鈴児売膏藥」と侮称を投げかけられる。串鈴とは、鈴を串さしにしたものを、マークとして、諸国を歩いて、膏薬や、土地、土地でできる薬草を売りあるいた民間医で、一般の医師より低級なものとされた。行医、走医、鈴医などともいわれる。『金瓶梅』中にも、この鈴医が、他にも登場している。

(三三) 西門慶の正妻、呉月娘は早産をする。妊娠五カ月となったが、腹痛がつよく、西門慶家に出入りする、なんでも屋の劉婆に相談し、大きな黒い丸薬二つをのみ、おろす。すなわち、

教月娘用艾酒吃、那消半夜、弔下来了。在橋桶内、点燈揆看、原来是個男胎、己成形了、正是「胚胎未能全性命、真靈先到查冥天」。

という状態であった。当時の風習として、室内に便器(桶子)をおいて用をたしていた。また、女性が屋外の庭で、用をたしたり、路にすてる場面もみられる。

(四八、五三) 西門慶と李瓶児の間にうまれた官哥は生来、体が悪く、この回では、これに対する道教医学的、ないしは民間療法的な場面がみられる。

(五四) 李瓶児の体調がよくなり、任医官(任後選)が呼ばれる。任医官は李瓶児を脈診する(図2)。

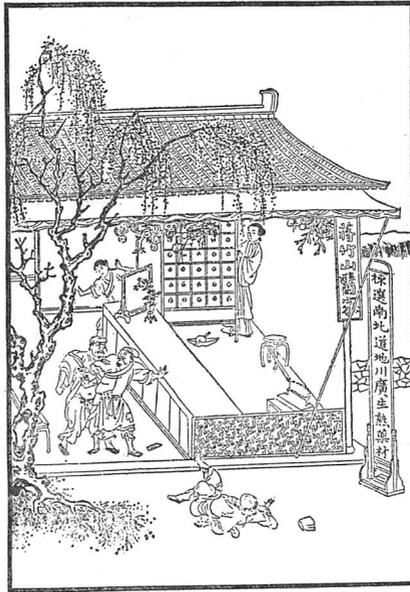


図 1



図 2

迎春(下女の名)便把繡褥来、襯起李瓶児の手、又把錦帕来擁了玉臂、又把自己袖口籠着他纖指、從長底下露出一段粉白的臂、来与太医看脈、太医澄心定氣、候得脈来、却是胃虚氣弱、血少肝経旺、心境不清、火在三焦、須要降火滋榮。

如今木尅了土、胃氣自弱了、氣那裡得生? 血那裡得生? 水不能載火、火都升上截来、胸膈作飽作疼、肚子也時常作疼、血虚了、兩腰子渾身骨節裡頭、通作酸痛、飲食也吃不了、

西門慶道「真正任仙人了、貴道裡望聞問切、如先生這樣明白脈理。」

太医道只是降火滋榮、火降了、這胸膈自然寬泰、血足了、胸脅自然不作疼了、不要認是外感、一些也不是的、都是不足

症、乃不足之症、其胸膈作痛、乃火痛、非外感也、其胸脅怪疼、乃血虛、非血滯也。

この場面は、中医学的見地からみても、興味があるところである。まず脈診をするのに、手の下に小さな枕をおき、錦の手巾をかけてみている。

五行相克理論によれば、木尅土だから、肝気が強くなれば、胃気が虚となり、気、血ともに不調となり、また腎陰不足、心火亢盛の状態は、心腎の陰陽平衡状態を失調に導き、いわゆる心腎不交の状態となる。精神的ストレス、肉体的疲労による。従って心火の下降を図り、腰や脇腹の痛みも、血虚によると考えられるので、降火滋榮の薬剤がよいという。そこで降火滋榮湯と、加味地黄丸が与えられる。

このときの謝礼は一両であった。

(五五) ここは前回の場面と重複している。原文を書き直しているのかもしれないが、前回の表現には及ばないようである。

却説任医官看了脈息、「夫人這的病、原是産後不慎調理、面帶黃帶、飲食也沒些要緊、大凡婦人産後、小兒痘後、最難調理、如今夫人兩手脈息、虚而不実、按之散大、却又軟不能自固、這病症都只為火炎肝腑、土虚木旺、虚血妄行、若今番不治、他後辺一癸不的了、只是用些清火止血的藥、黃栢知母為君、其余只是地黄、黃芩之類、再加減些吃下看住、就好了。

任医官は、この病氣は、産後の養生がよくなかったからだといひ、さらにおよそ、婦人の産後と、小兒の痘瘡の後が難かしいのだという。また、清火止血剤がよいとあるが、清熱涼血の方法、すなわち、血熱(虚熱)妄行による出血とも考へている。衛氣營血理論からいえば血分虚熱症のことをいうのであろうか。君薬である、黄栢、知母と黄芩の性味はすべて、寒と苦であり、生地黄なら寒、苦、熟地黄とすれば、温、甘となる。この李瓶児の状態では、これら薬物を用いる実熱状態とは異なるから、いずれにしる、矛盾を感じるところである。この状態ならば、温、甘であらう。

(五九) 官哥の状態はひきつけをくりかえし、ついに意識不明となり、小児科医をよんで、さきにあげた、接鼻散のテストをしたが無効であった。そこでいろいろいな、道教医学的な展開もあったが、ついに一歳二カ月の命をおえる。

(六一) 李瓶児はさらに、性器出血がひどくなり、重症となる。まず任医官がよばれ、

診畢脈、「老夫人脈息、比前番甚加沈重些、七情感傷、肝肺火太盛、以致木旺土虛、血熱妄行、猶如山崩而不能節制、若所下的血紫者、猶可以調理、若鮮紅者、乃新血也」という。

すなわち脈は沈重で病情は重いことをいい、前回より悪化し、七情つまり、嬉、怒、憂、思、悲、恐、惊の七種の精神の因子が悪化したためだと説明する。七情の情志的な過労状態は、ストレスをうみ、内臓機能失調をもたらし、気血の不調が疾病を発生するとされる。また出血の色で良し、悪しを西門慶に説明している。そして、帰脾湯が処方される。謝礼は、抗州産の絹一疋と銀一両であった。

さらに状態が悪化し、大街口の胡太医が呼ばれるが、「子供をなくされて、気鬱となり、その気が血管をつき、ついに血行に入ってしまった」と説明する。

ついで、県庁前の何老人がよばれる。八十一歳の彼は、李瓶児をみてその状態に驚く。そのさまは、

面如金紙、体以銀条、五臟膨脹、六脈細沈、東岳判官催命去、西方仏子喚同行、喪門弔客臨身、扁鵲盧医難下手。

で、名医、扁鵲でも如何ともしがたいと、匙をなげた恰好となる。そこへ、やはり依頼していた城外にすむ趙龍崗という婦人科医がやってくる。彼は趙搗鬼(趙ごまかしや、ペテン師)だが、

毎日攻習王叔和(魏晋代の名医、『脈経』の著者)、東垣(金元の名医、金元四大家の一人、李東垣、または李杲、『脾胃論』で名高い)、勿聽子(不明)、黄帝素問、難経(秦越人、すなわち扁鵲作とされる)、活人書(活人書と名がつくものは数種がある。『南陽活人書』とすれば、宋の朱肱著であり、『傷寒論』についての記述)。丹溪纂要(金元四大家の一人、朱丹溪、あるいは朱震亨の著)、丹溪心法(同上)、潔古老脈訣(金元四大家の一人、張元素、字潔古の著『潔古註叔和脈訣』が正しい)、加減十三方(元、徐

文中字用和の著)、千金奇効良方(不明、『奇効良方』とすれば明、方賢の著)、寿域神方(明、著者不明、『延寿神方』ともいう)、海上方(宋、著者不明)、無書不読、無書不看、定関格之沈浮、風虚寒熱之症状、一覽無余、弦洪朮石之脈理、莫不通曉。という、関格とは、『素問』六節藏象論第九に、人迎寸口診でともに四倍以上の場合をいい、死に近い。同じ脈要精微論篇第十七では陰陽不相応の病名としている。弦脈は肝胆疾患時の代表脈、洪脈は熱盛状態を示す脈、朮脈とは、浮大で軟、中ほどが空虚にふれるもので、血虚となり気をコントロールできない状態、すなわち失血時にみられる。石脈は弾石脈ともいい、死脈であるとされる。

さらに趙太医は、詩で自分のことを、売杖播鈴といい、行医ともいっているから、さきに述べた、串鈴医である。処方するのも出たとこ勝負、眼病には灸を、聾には針をさすとも述べているから、この串鈴医は鍼灸も一詣にしていたとおもわれる。

ここで西門慶との間で滑稽なやりとりがある。趙太医は李瓶児の脈診を行い、李瓶児に自分は誰かと聞くと、お医者でしようという、心配はない。死んだりしません、人の顔がわかるからといって西門慶は失笑する。

さらに、趙太医は脈診して、「非傷寒則為雜症、不是産後、定然胎前」「敢是飽悶傷食、飲饌多了?」とかおかしなことをいい、また李瓶児の顔が黄色いのをみて、「黄疸」で下痢をしているだろうというが、西門慶にすべて違うといわれ、首をかしげ、横痂すなわち「便毒魚口」か、月経の異常だろうという、西門慶が女でなんでこれになるのか、月経異常はあたってるといわれると「南無仏那」(南無阿弥陀仏)といってほっとする。そしてその原因は「不是乾血癆(咯血)就血山崩」と答える。さらにその処方とは聞かれると、

甘草甘遂与礪砂、藜蘆巴豆与芫花、人言調着生半夏、用烏頭杏仁天麻、這幾味兒齊加、葱蜜和丸一種、清辰用燒酒送下。

といったので、そばにいた何老人は、おどろいて、これでは人を殺してしまうという、趙太医は、良薬は口に苦しとい

うではないかとすましている。西門慶はとうとう怒って二銭を与えて追い出してしまう。何老人は彼のことを、此人東門外有名的趙搗魂、專一在街上売杖鈴。

と西門慶に説明して、西門慶は何老人に銀一兩の御礼をする。

(六二) 西門慶は李瓶児の狀態が、

服藥百般醫治無効、求神、問卜、發課、皆有凶無吉、無法可處。

といった状態となり、三七薬や棕灰と白鷄冠花の煎薬も効がない。そこで西門慶は三百七十兩を出して、李瓶児のために立派な棺をもとめる。しかし、遂に二十七歳で世を去る(政和七年九月十七日、一一一七年)。

李瓶児の性器出血が長くつづき、死に到るまでの経過をみると、四月末に胸や腰、腹部に痛みがあり、任太医の診察をうけている。また前年の六月二十二日に官哥をうみ、その官哥は、八月二十三日に死亡しているが、その後精神的な負担もあって急激に症状が悪化している。その病名としては、彼女の二十七歳という年齢、分娩後ということをおいあわせると絨毛癌がまず考えられ、ついで子宮癌(頸部癌)あるいは下腹痛、発熱があったとすれば子宮筋腫の感染も否定できない。

(七五) 呉月娘は潘金蓮と口争いをして気分が悪くなり、劉婆を呼んで、

吃他服藥、再不、頭上剝兩針、由他自好了。

という。この劉婆という西門慶に出入りしている婦人は、前にも出てきているが、ここでも薬を与えていたり、針を刺しているということがわかる。

(七六) すでに妊娠している呉月娘は、任医官の診察をうける。

月娘向袖口辺飾玉腕、露青葱、教任医官脈診、任医官道「老夫人原来稟的氣血弱、尺脈来的又浮洪、雖有胎氣、有些采衝失調、易生嗔怒、又動了肝火、如今頭目不清、中隔有些阻滯、作其煩悶、四肢之内血少而氣多。

彼女は元来、氣血が弱く丈夫ではない。脈診で尺位、すなわち体の下部の脈が浮洪であるといっている。これは精血不

足を表現している。そのため栄養が悪く、怒りやすく、肝火が上にのぼり、このため頭や目のはっきりせず、体の中ほどに障害が若干あり、気分がすぐれないのだと説明する。そして清胎、理氣、和中、養榮、けんづ罇痛之劑をあげましょうという。清胎とは安胎を期する方法。理氣とは、氣滯、氣逆に対する方法、和中とは、広くは理氣法で、和胃理氣、すなわち胃などに對する補氣法、養榮とは榮養の、罇痛とは、止痛法をいう。ここでは暖宮丸を処方する。

西門慶はこのとき、任医官に一兩の謝礼をしている。

(七九) 西門慶は、潘金蓮との房事中、胡僧からもらった、催淫劑を彼女から多く与えられ、正月十三日重症となり、ついに命をおとしてしまう。その症状のげしさは、

那管中之精、猛然一股、遑将出来、猶水銀之瀉箇中相似、忙用口接嚙不及、只顧流将起来、初時還是精液、往後尽是血水出来、再無个収救。精尽繼之以血、血尽出其冷氣而已。となり、さらに、翌々日には、

下辺虚陽腫脹、不便処發出紅暈来了。連腎囊都腫的明滴溜如茄子大、但溺尿、尿管中猶如刀子掣的一般、さらに翌日になると、腎囊腫張破了、流了一灘鮮血、龟头又生出疔瘡来、流黃水不止、西門慶不覺昏迷。

の有様となり、三十三歳の命をおえる(重和元年、正月二十一日五更、午前三時から五時の間、一一一八年)註(三)
この間の西門慶の受診情況は次のようであった。

まず任太医がよばれるが、脈診をして、

乃虚火上炎、腎水下竭、不能既濟、乃是脱陽之症、須是補其陰虛、万繞好得。
という。

すなわち、房事過度で、陰液が不足し、陽氣が相對的にあまり、虚火上炎、陰虚状態となり、血虚となる。そしてこの腎陰虚は、亡陰から、陽氣の極度の損傷によって亡陽と進展し、全く重篤になるのである。

ついで、李瓶兒も診てもらった胡太医をよぶと、西門慶の状態を、

下部蘊毒、若久而不治、卒成溺血之疾、迺是忍便行房。

といっている。すなわち、体の下方に毒がたまり、早くよくならなければ、血尿症になるだろうと診断している。

次に、李瓶児のときやって来た何老人の子息、何春泉が診療にくる。そして、

是癰閉便毒、一団膀胱邪火、趕到這辺下来、四肢経絡中、又有湿痰流聚、以致心腎不交。

と説明する。すなわち、性生活の不節制は、腎陰不足をまねき、心火(陽)の下降と腎水(陰)の上昇という心腎の陰陽平衡の失調をおこし、心腎不交となり、腎陰虚となり、虚火がおこる。膀胱邪火というのもこれである。

これら三名の医師に対する謝礼は五錢の銀子となっている。

また紹介で、劉橋齋がよばれ、脈をとり、局所をみて、薬を塗り、煎薬を与える。謝礼は杭州絹一疋と、一両であった。

この図(図3)は西門慶が薬をのんでいるところで、薬研などがみられる。さらに、状態がわるくなると、道士の呉神仙にきてもらう。彼は医療と占いの二つをしているが脈をとり、

是酒色過度、腎水竭虚、是太極邪火、聚於慾海、病在膏肓、難以治療。

という。すなわち腎水が枯渇し、腎陰虚となって、全身の虚熱が性器に集まってしまったので、どうしようもないと説明している。この呉神仙はかつて、西門慶の命は三十三歳までだと占っている。この謝礼は絹一疋となっている。

西門慶が死亡した日、呉月娘は急に産気づき、蔡婆がよばれ、無事男児が生まれる。孝哥である(図4)。

(八五) 潘金蓮は、西門慶の娘むこの陳経済と通じ妊娠してしまふ。そこで、彼に三錢持たし、胡太医を訪ね、墮胎薬をもとめる。胡太医は、分娩のことできたのかと、かんちがいして、

我家医道大方脈、婦人科、小兒科、内科、外科、加減十三方、寿域神方、海上方、諸般襍症方、無不通曉、又專治婦人胎前後。且婦人以血為本、藏干肝、流干臟、上則為乳汁、下則為月水、合精而成胎氣、女子十四而天癸至、任脈通放、

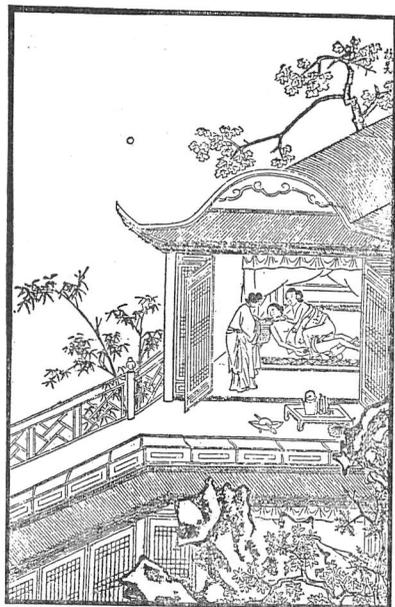


図 3



図 4

月候按時而行、常以三旬一見、過於陽則經水先期而來、過於陰、則經水後期而至、血性待熱而流、寒則凝滯、過与不及、皆致病也、冷則多白、熱則多赤、冷熱不調、則赤白帶、大低血氣和平、陰陽調順、其精血聚而包胎成。心腎二脈、応手而動。精盛則為男。血勝則為女、此自然之理。胎前必須以安胎為本。如無他疾、不可妄服藥餌、待十月分娩之時、尤当謹護、不然、恐生產後諸疾。

經済はこれを聞いて、お産のことで来たのではなく、おろしたいのだといって、さらに二錢追加すると、胡太医は、我与紅花一掃光、吃下去、如人行五里、其胎自落矣。

といて紅花湯を与えるが、その際、『西江月』（唐代詞曲の名、歩虚訶ともいう。）にもその証拠があるといつて、

牛膝蟹爪甘遂、定磁大戟芫花、斑毛赭石与礪砂、水銀与芒硝研化、又加桃仁通草、麝香文帶凌花、更燕醋煮好紅花、管

取孩児落下。と説明し、紅花湯を煎じてのんで、目的をはたすが、「好事不出門、惡事伝千里」で皆に知られてしまう。ここで胡太医のいつている大方脈とは内科のようなものである。血は婦人の重要なもので、肝で臓せられ、また流れて肝にそそぐ。一方、肝腎同源という考えがあつて腎は精を蔵し、たがいに補いあう。したがつて精血同源であるので、これらが相い働いて妊娠ができる。また「女子十四而天癸至」とは、『黄帝内経素問』上古天真論篇第一にみる言葉である。

「過於陽則經水先期而來……」とは、月経が周期より早く来る月経先期と、遅れてくる月経後期のことをいつている。前者については、実熱とか血瘀血滯とするものが多く、流れ易くその色は赤いという。平素体が丈夫なものが、飲食または外感熱邪に侵されてなり易い。後者については、血虚に由来するものが多いとするものが多い。この場合冷えとかストレスなどが原因で、陽氣不足（血虚）、腎精不足となり不妊におち入り易い。寒則凝滯とはいわゆる寒凝血瘀である。一般に血は薄く、量は少ない。張景岳の『景岳全書』婦人規などに記載されている。

「心腎二脈」については、『黄帝内経素問』平人氣象論篇第十八に、「婦人手少陰脈動甚者、妊子也」とある。註四「精盛則為男」についてみると、宋、陳自明『校註婦人良方』胎教門に「精勝其血、則陽為主、受氣於左子宮而男形成。精不勝血、則陰為主、受氣於右子宮而女形成」という記載をみることがができる。安胎のためには、むやみに薬をとらないほうがよいと妥当なことをいつているが、『西江月』のところで、出てくる薬は、多くは劇薬で、妊婦禁忌薬であり、それ故、墮胎薬に用いられるのであつて、紅花は破血作用があり、活血化瘀作用が強い。

(九〇) 孝哥が発熱し、意識がはっきりしないとき、劉婆が呼ばれ、彼女は脈をとり、硃砂丸を姜湯とともに服用してよくなったことはすでに述べてある。

このときの、謝礼は三錢であつた。

(一〇〇) 最終回、潘金蓮の女中であつた春梅は、周統制という武人に嫁ぐが、『水滸伝』中の英雄、宋江征伐の最中、

戦死する。彼女はその後、その家来の子息、周義と密通を重ね、日夜もない有様となり、ついに、骨蒸病症になってしま

い、
逐日吃薬、減了飲食、消了精神、体瘦如柴、而貪淫不已、一日過了他生辰、到六月伏暑天氣、早辰晏起、不料他棲着周義在床上一泄之後、鼻口背出涼氣、淫津流下一窪口、就嗚呼哀哉、死在周義身上、亡年二九歲。
となる。

その後、西門慶家も、金軍の侵入で避難するが、永福寺の普静老師によって、この長い大河小説に出てきて、死亡した人々の後生（托生）の有様が語られる。のちに西門慶家は、忠実な使用人、玳安が盛りかえし、西門安と名をかえ、西門小員外と人々からいわれるようになる。彼は月娘を養い、彼女は七十歳の寿をたもつことができたというところでこの物語りはピリオドがうたれる。

ここで医師の謝礼についてみよう。おのおののところでその金額についてふれたが、銀一両、絹一疋とはどのくらいのものであったろうか、『中国貨幣史』（彭信威著、上海人民出版社、一九八八年八月）を参考してみよう。物の価値は時代によって変動することはいうまでもない。

『金瓶梅』の背景は、日本では、藤原忠実の平安時代であるが、実際には、明代で、足利義晴とか、織田信長などが活躍していた時代と思つてよい。明代を中心にしてみる。

まず単位からいえば、公石Ⅱ一〇〇リットル、公升Ⅱ一リットル、一石Ⅱ十斗、一斗Ⅱ十升、一升Ⅱ十合、一両Ⅱ一〇〇文錢として計算する。（一）内宋代平均。

米価：每公石、一・一両（〇・五両）

絹每疋：〇・五両（一・〇両）

馬一匹：二〇両（十四・三両）

牛一匹：五・五兩（八・〇兩）

羊一匹：〇・五兩（〇・六兩）

猪一匹：一・五兩

犬一匹：〇・一兩

鶏一羽：〇・四兩（〇・一兩）

膏藥每張：一文

こうみると、西門慶が支払っていた医師に対する謝礼は相当高額であったことがわかる。

ちなみに、我が国の江戸時代の貨幣制度では、一兩 \parallel 四分 \parallel 十六朱 \parallel 四〇〇〇文 \parallel 四貫文、一分 \parallel 四朱 \parallel 四〇〇〇文 \parallel 一貫文、一朱 \parallel 二五〇文という四進法がとられていた。

三、鍼灸関係部門

次に、鍼灸関係をみてみると、鍼をさすという文字は出てくるが、具体的な記述はみられない。灸関係と導引按摩の部があるので述べておきたい。灸はいずれも、直接灸で、治療として行われる場合と、セックスの場面るとき登場してくる興味があるところがある。

（八） 潘金蓮は夫であった武大の死をともらうため僧を呼んで施鍼鬼をしてもらうが、その最中、来ていた西門慶と事を行う。西門慶は、

你且休慌：我還要在蓋子上燒一下兒哩…

あわてないで、まだ蓋子 \parallel 恥骨丘の処を焼かなければというが、この場面はのちのいろいろな場面を考えると灸をすることをおいておられると思われ。

(三二) 西門慶と李瓶兒との間にうまれた子、官哥が具合がわるくなると、吳月娘は劉婆を呼ぼうというが、西門慶は、劉婆のことを、

胡針乱灸的、另請小兒科太医看孩兒。

という。胡針乱灸とは、文字通り、いかげんに針をさし、やたらに灸をすえるということを行っている。

(五二) 西門慶はやって来た、床屋に頭をすかせ、耳掃除をさせて、さらに、

搯捏身上、他有滾身上一弄兒家活、到处都与西門慶滾捏過、又行導引之法、把西門慶滾弄的渾身通泰。

この場面は、床屋が体の上を按摩する道具をもっていて(多分、現在のローラー器のようなものか?)彼の体中を按摩したうえで導引術を施したことになる。そして体がすっかり楽になり、五錢与えている。

(五七) 西門慶は、吳月娘にちくりと釘をさされるが、このとき「項門上針」という言葉が使われている。項門の一針ということで、ツボにうまくはまった一針ということである。項門とは百会穴(督脈)に相当する。

(五九) 官哥がひきつけ、意識不明となり、劉婆が呼ばれ、彼女は官哥の

眉攢、脖根、両手関尺舛心口、共灸了五薰を行う。

このうち、眉攢は攢竹穴(膀胱経)、脖根とは、いわゆる「ぼんのくぼ」のことだから、啞門穴(督脈)、関、尺とは寸口診でいう関、尺、とすれば、経渠穴と列缺穴(肺経)が、また心口とは「みずおち」だから中腕穴か上腕穴(任脈)に相当すると思われる。五薰の薰とは、ほんの少しひたすということだが、あとの(七八)回に、西門慶が灸をするのに、酒につけたもので灸をしているから、ここでは、これで五カ所灸をしたという意味であろう。しかし実際の施灸部位は七カ所である。

(六一) 西門慶の系列の糸屋の番頭に韓道口の妻、王六兒と西門慶が通じたとき、

燒了王六兒心口裡、拜拜蓋子上、尾停骨兒上、共三処口。

をセックスのときに行っている。毳蓋子とは恥骨丘だろうが、尾停骨は尾骨部とおもわれる。愛情のあかしの灸をするということは、性感増強のためか理解しにくいところである。

(六七) ここでも床屋を呼んで耳掃除をさせたらうで、

拿木滾撥子身上、行按摩之術。

を行っている。

(七五) 妾の一人、孟玉楼が、嘔吐し苦しんでいるのをみた西門慶は、

我專一会揣骨捏病、手到病除。

と、酔った勢いで、自分が体をこねたり、ひねったりすれば病気は治ってしまうというが、結局は、広東牛黃清心蠟丸で治る。

(七八) 西門慶は林夫人（役所での上官の妻）と交わり、そのあとで、

西門慶就任這婆娘心口与陰戸、焼了兩炷香。

という具合となる。陰戸とはやはり大陰唇ぐらいのところではなからうか。陰戸そのものところは、粘膜だから灸はしないのではないかと思われる。

(七八) さらに同回、疲れた西門慶は、延寿丹を服用することを思いたつ。この薬は乳とともに飲むことになっている。そこで乳母の章四兒に乳をほしいという。

彼は急に彼女に春情を催し、

我兒、我心里要在你身上焼炷香兒。

というと、彼女はどうぞという。この灸をすえたいということは、情を通じたいという意志表示になっていることがわかる。西門慶はさきの林夫人に使った灸の残りで、焼酒に浸したものを用いている。

撤去他抹胸児、一個坐在他心口内、一個在他小肚児底下、一個安在他毯蓋子上。

という情況である。抹胸児とは胸あて、ブラジャーのようなものをいう。小肚とは下腹部をいう。

灸や導引按摩という方面が、前者は治療面では、劉婆のような、なんでも屋がしたり、性的な欲情の発露となっていたり、後者にあつては、床屋（今でも理髪店ではマッサージをサービスとしているが）がこれを業としていたことなど、当時の情況が反映していることを知った。

四、医学に関する詩詞、言葉

『金瓶梅』では、医学に関係する広い意味での詩詞や言葉が多く出てくる。これらをざっとながめてみたい。

(八二) 当帰半夏紫紅石、可意檳榔招做女婿。浪蕩根挿入薑麻内、母丁香左右俛、大麻花一陣昏迷、白水銀撲簇下、紅娘子心内媵、快活殺兩片陳皮。

すでに(六一)(八五)の薬をおりこんだ詞を紹介してあるが、これは情交の有様をうまくうたっている。

(二) 第一、腰便添疼。第二、眼便添淚。第三、耳便添聾。第四、鼻便添涕。第五、尿便添滴。

(一) 思情似漆、心意如膠。

両者の親密のさまという言葉、他に似たものに次のようなものがある。

情沾肝腑、意密如膠(六)(八二)。

如膠似漆(八)(十三) 似漆投膠(九九)。

(七) 屁滾尿流。

非常に喜ぶことをいう。意味はちがうが、似た字を使ったものに、

尿酸(泡)種子(三二)(四一)がある。

(八) 我若負了你情意、生碗来大疔瘡、害三五年黃病。

もし、お前の気持にそむけば、碗ほどの大きな疔とか、三五年もわづらう黄疽になってしまいうだろう。(だからそんなことではない)との意。

(九) 分門八塊頂梁骨。

頭の骨が八つにさけるほどの驚き。

(一〇) 病草萋萋遇暖風。

(二六) 病草凄凄遇暖風。

地獄に仏といった意味。

(二一) (六二) 肚裡蛔虫。

何を考えているのか、貴方の腹の中にいる蛔虫ではないからよくわからないと、いう意味の言葉に用いられている。

(二一) 三尸神暴跳、五陵氣冲天。

(七五) 三尸神暴跳、五臟氣冲天。

三尸とは道教学的な身体観。上、中、下の丹田にそれぞれ三尸神がいるという考えかた。五陵とは、唐長安の五帝陵をいうが、当時の詩人は長安の青年のことを五陵青年といった。それから五陵氣とは、血氣が旺んなことにたとえる。五臟氣とは文字通り五臟の氣が天をつくということ、怒り心頭に発すというような意味。

(二一) 寄語富兒休暴珍、儉如良藥可医貧。金持ちの人よ、ばかなことはやめなさい。儉約こそが、貧乏をなおす良薬だということ。

(十二) 捱一刻似三秋、盼一時如半夏。

(八五) 挨一日、似三秋、過一宵如半夏。

ともに一日千秋のおもいといったこと、その待ちどおしさを、中薬の半夏にかけている。

(二三) 頭上打一下、脚底板響的人。

打てばびびくという人のことをいう。

(二四)(二五)(八二) 七個頭八個胆。

胆っ玉の大きいことをいう。

(二七) 雖盧扁莫之能救。

(六一) 扁鵲盧医難下手。

(七九) 総是盧医怎奈何！

いづれも扁鵲(盧医)ほどの名医でも、どうしようもないこと。

(二七)(五九) 驚損六葉連肝肺、誑壞三毛七孔心。

驚きのはげしいさまをいう。

(四七) 驚駭六葉連肝胆、誑壞三魂七孔心。

右と同じこと。

(二〇) 七病八病。(一) 十病九痛。

いろいろの病気があるということ。

(二六) 与其病後能求藥、不若病前能自防。

自分自身の病気の子防、ふだんの養生が重要だということをいっている。

(四一)(八六) 養蝦蟆得水蠱兒病。

予期しない結果がうまれたことをいう。

(四八) 孩子顛門未長満。

頭蓋の大泉門がまだ開いているということから乳児をさしている。

(五一)(七四) 一個毛孔裡生個天疱瘡。もし、悪いことをしているなら、一個一個の毛穴に疱瘡ができるだろう(だからそのようなことはしていかない)といった意味。

(六三) 龍鬚煮藥医無効、熊胆為丸晒末乾。悲しみがつよいと、何をしても効めがなく、また何もする気がないといった意味のとき使われている。

(七九) 病在膏肓、難以治療。

文字通り重篤な状態のこと。

(八十) 晧唾融心溢肺肝。

甘いつば(接吻して)が心をとろけさせ、肺や肝にあふれること。食べて美味しいとき沃肺融心(六七)という言葉も出てくる。

(八十) 痰火之疾。

咳嗽、痰は黄、気管支炎のような症状。

(八三)(九八) 木辺之目、田下之心。

このとおり追っていくと「相思」という字となる。

(九四) 六慾七情。

六慾とは、仏教でいう六賊根、つまり、眼、鼻、舌、耳、意、身の慾をさす。七情とは、嬉、怒、憂、思、悲、恐、驚の七種の精神情志の変化をいい、中医学では六淫(風、寒、暑、湿、燥、火)七情ともいう。

その他、出現する字句を紹介すると、

心肝―いとしい大事なあなたということ。たとえば、「我的心肝」「心肝性命」など。吃洗脚水―泥水でものめといった意味。

洗足、修了足甲―房事の前に足を洗うことであるが、単にそれだけでなく局所を洗ってきよめるという意味もあるとされている。

その他、現在我々が使っているのと同じ言葉がある。たとえば、感冒、風寒、傷寒病、破傷風、精液、月経、生薬などがある。

おわりに

いままでみてきたように、『金瓶梅』のなかには、中医学的方面からみて、いろいろな面があることがわかった。

その医療を担当するものも、任医官、何大医などの医師もいるし、趙や胡医師のような、いかげんのもいる。また、いわゆる串鈴医（鈴医、行医、走医）といった、民間医に近いものもいるし、道士が脈をとったり、施薬したりして、その範囲も極めて雑然としている。

また、特色があったのは、劉婆のような、巫医といってもおかしくない働きをしているものがいたり、薛尼、王尼といった尼が、妊娠を期待する符水を与えたり、他方では祈禱や、宝巻をよんだりしている。このような面白いわゆる「三姑六婆」(道姑、卦姑、尼姑と牙婆、媒婆、師婆、虔婆、藥婆、隱(座)婆)『輟耕錄』の活躍が特色で、これらはまた、西門慶家に入り、密着して生活している。このような明代の風景が目の前に生々しくあらわれてくるのである。その医学と、マジカルな咒的な方術面の境界もぼやけて、道教医学的側面も強く浮びあがってくる。この道教医学見地から検討を加えたものは、別稿とした。

ところで、この『金瓶梅詞話』にみられる中医学的などころは、その描写が、医学的な素養がなければ記述できないところからみて、その作者とされている「笑笑生」はいかなる人物であったのだろうかという疑問さえでてくる。この人物は、医師あるいは医師に近い医学に詳しいものだったろうか。あるいは、著者は一人ではなく、医学的な部分は、専門家が書いたか、または、助言を得ていたのかもしれない。

いずれにしろ、『金瓶梅』は、単なるフィクションというだけでなく、明代という時代の有様を如実に我々に残し、知らせてくれている大きな遺産といえよう。

註

(註一)すでに『周礼、地官媒氏疏』に、「三十之男、二十之女、和合使成婚姻」とあるから、和合とは婚姻—男女の契りであることが分る。和合湯、または和合茶は婚姻風俗として見られる。新郎、新婦と伴娘という媒酌婦人とが、床の上で、和合茶をそれぞれ三口づつ飲み、仲良く、和い睦じく、幸福を願う。この和合茶は、鶏卵、紅茶、荔枝が入っていて、早く子供がでるようになるという願いが込められている。婚礼時にかかげる絵に、「和合二聖図」がある。伝えられる処によれば、この二人は財神の趙玄壇の部下であるという説と、清の雍正帝が唐の貞観時代の高僧である寒山・拾得を封じたが、その彼等であるという説がある。いずれにしろ、夫婦の和諧を祈ったものである。永尾龍造氏の『支那民俗誌(一)』に「和合符」の図があるが、これは和合こそが、天地間の最も根本的な法則であるということをシンボライズしている。

(註二)朱砂丸薬は、官哥が発熱、嘔吐、驚心状態になったとき、次の薄荷燈心湯と共に劉婆がのましている。次の硃砂丸は孝哥が同じような有様のとき、やはり劉婆が生薑湯とともに与えている。

(註三)媚薬の誤飲による症状であるが、これほど急激で、重篤な経過をとる西洋医学的病名の適当なものがない。炎症、出血、疼痛などによりショック状態に陥ち入り、救命的手段も全くなかったといえる。小説の一場面としての誇張的表现であるということも考えなくてはならない。

(註四)ここで「手小陰脈」とは何を指しているかということについては、いくつかの説がある。一、神門穴(手の少陰心経)という説。王冰注では、「手少陰脈、謂掌後陷者中、当小指動而応手者也」とある。二、寸口脈の尺部だという説。『素問直解』

卷二に、「小陰、尺脈也。：両手少陰動脈甚者、則知腎氣有余、感天一所生之氣、故妊子也」としるされている。三、「手小陰」とは「足小陰」だという説。新校正に「按全元起本作足少陰」とかかれている。本論ではここまで詳註する必要もないと思われたが、筆者としては、誤解をさける意味で、註にしるさせていただいた。筆者としては第二の説をとりたい。

参考文献

- (一) 吉元昭治『道教と中国医学』、『道教2』二五五―三二〇頁、平河出版、東京、一九八三（昭和五十八年）。
- (二) 吉元昭治『道教と不老長寿の医学』平河出版、東京、一九八九（平成元年）。
- (三) 蘭陵笑笑生『全本金瓶梅詞話』香港太平書局、香港、一九八七年。
- (四) 允鍵編『金瓶話詞話』增你智文化事業、台北。
- (五) 齊煙他校点『新刻繡像批評金瓶梅』三聯書店、香港、一九九〇年。
- (六) 小野忍他訳『金瓶梅』平凡社、東京、一九六二（昭和三十七年）。
- (七) 丁燦亢『統金瓶梅』天一出版、台北、一九七五（民國六四年）。
- (八) 澤田瑞穂『増補宝巻の研究』国書刊行会、東京、一九七五（昭和五十年）。
- (九) 吳晗等『論金瓶梅』文化芸術出版、北京、一九八四年。
- (一〇) 復旦学報編『金瓶梅研究』復旦大学出版社、上海、一九八四年。
- (一一) 魏子雲『金瓶梅詞話注釈』上・下、中州古籍、河南省鄭州、一九八七年。
- (一二) 劉輝他編『金瓶梅研究集』齊魯書社、山東省済南、一九八八年。
- (一三) 周鈞韜『金瓶梅探謎与芸術賞折』吉林文史出版、吉林省長春、一九九〇年。
- (一四) 李布青『金瓶梅俚語俗諺』宝文堂書店、北京、一九八八年。
- (一五) 俞志文『金瓶梅知識問答』華岳文芸出版、陝西省西安、一九九〇年。
- (一六) 徐君慧『從金瓶梅到紅樓夢』広西人民出版社、広西省南寧、一九八七年。
- (一七) 石昌渝他『金瓶梅人物譜』江蘇古籍出版、徐州、一九八八年。
- (一八) 古典文学研究資料彙編『金瓶梅資料彙編』中華書局、北京、一九八七年。

- (一九) 劉守華「中國民間敘事文學的道教色彩」『中國道教』一九九〇年。第一期、總十三期、二三—二五頁、一九九〇年。
- (二〇) 遊佐昇「道教と文學」『道教2』三一—三六九頁、平河出版、東京、一九八三（昭和五十八年）。
- (二一) 王利器編『金瓶梅詞典』吉林文史出版、長春、一九八八年。
- (二二) 上海市紅樓夢學會編『金瓶梅鑑賞辭典』上海古籍出版、上海、一九九〇年。
- (二三) 唐圭璋編『唐宋词鑑賞辭典』江蘇古籍出版、徐州、一九八六年。
- (二四) 田宗堯『中國古典小說用語辭典』聯經出版、台北、一九八五（民國七四年）。
- (二五) 江克明他『簡明方劑辭典』上海科學技術出版、上海、一九八九年。
- (二六) 朱良春他『實用方劑辭典』江蘇科學技術出版、徐州、一九八九年。

（順天堂大學産婦人科）

Chinese medicine discovered in “Jing Ping Mei” (金瓶梅)

by Shoji YOSHIMOTO

Using a novel written in the Ming dynasty (明) and dealing with the time of Song dynasty (宋), I tried to assess the common medical services available in those days. The name of the novel is “Jing Ping Mei”. The book contains many descriptions of sexual acts and had long been listed as an erotic novel, but by studying its contents closely we came to see that the life of the people in olden times is vividly and concisely illustrated.

When a person became critically ill, first a doctor was called in, and then the so-called “three nuns and six old women” (三姑六婆) gave herb drugs or moxa treatments. They sometimes worked as midwives, said prayers, or acted as a shaman. They lived closely with the family of Xi Men Qing (西門慶). If these women were unsuccessful, taoists came to pray and perform rituals. Finally the diviner or fortune-teller (yin-yang master, 陰陽師) made preparations to allow free passage to the other world. Then the date of the funeral, position of the tomb, and the fate of the person were told. These steps are all described in the book.

The doctor deals with many departments, such as Ren (任), He (何), Liu (劉). Bogus doctors such as Hu (胡), and Zhao (趙) also appear in the stories. They are generally called bell doctors or wandering doctors. They are regarded as second-class doctors, but they were more popular with the common people and were engaged in medical services. In fact, it seems that they were respected by the townspeople. In some ways, they were associated with taoism.

Throughout the novel, about 20 varieties of Chinese herbs are mentioned, including non-medicinal ones.

In the examination scene, pulse diagnosis is the main activity, and the diagnosis given seems to be sufficiently acceptable from the viewpoint of Chinese medicine.

Moxa treatment, acupressure therapy, and massage are also mentioned. Interestingly enough, moxa is burnt during the sexual act. Perhaps it was an old habit, as it is mentioned in several scenes. There are also a couple of poems referring to medicinal herbs.

Thus, “Jing Ping Mei” tells us of the medical practices and habits common in China in those days. We come to easily see the connections between taoism and medicine. The book is so full of interesting medical materials that, instead of reading it as an erotic novel, it seems to be important to study it from the medical point of view.